

「作文宮城」といえば、69年の間、宮城県の小学生のお手本となる詩や作文を掲載し続けている伝統ある冊子である。全県の小学校から、地区審査を通った作品が、国語教育の専門家が集まる「県審査」で認められたわずかな作品だけが掲載される。私は掲載された経験もないし、担任した子供が掲載されたこともない。かなりの狭き門と言えらると思う。

それが今年、長瀬小の3年生・4年生の詩文、6年生の作文の3作品が掲載されると通知があった。嬉しいより先に「ええっ3点も！この小さな学校から…」という驚きが先に来た。6年生は、昨年に続き2年連続の掲載である。

本校から、地区審査に出す前に、各学年の代表作品を読んだが、今日あらためて3つの作品を読んでみた。普段は大人の書いた論説や論文ばかり読んでいる私には、どの作品も、みずみずしいフルーツをかじったような爽やかさ、まっすぐな素直さ、心の温かさを感じさせた。そして、なぜか涙があふれた。

「コロナ禍でも、こんな気持ちで生活していたんだなあ…。子供って強いなあ。しなやかだなあ。」

この3人が特別ではない。長瀬の子供たちは、みんなそんな気持ちで生活していたんだろうな。こういう子供たちを育てていただいたご家庭、地域に頭が下がる思いでいっぱいになる。

子供読書活動の文科大臣表彰、「作文宮城」の快挙と子供たちの国語の力は伸びているんだろうな。

あれ？長瀬小が懸命に研究しているのは…算数！